

令和6年度 学校自己評価システムシート (埼玉平成中学校)

目指す学校像	将来の進路実現のために必要な学力や知識を身につけさせるとともに、実践をととして豊かな人間性を磨き、社会の中でたくましく生き抜くために必要な資質や能力を身につけさせる学校づくりを目指す。		
重点目標	一人ひとりの「個性」や「才能」を伸ばす 1 科学的思考力の育成 2 英語力を鍛える教育の徹底 3 コミュニケーション能力の強化 4 体験学習を通じて感性を磨き、人間力を養う 5 将来を見据えた進路指導 6 生徒募集を強化し、入学者数の増加		

学校自己評価										学校関係者評価
年度目標					令和7年度評価					実施日
					中間（9月2日現在）		令和6年度末（3月8日現在）			
番号	重点目標 （評価項目）	現状と課題	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の進捗状況	達成度	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	科学的思考力の育成	・科学分野の思考力が十分に身についていない。 ・科学分野の体験的な実践が充分ではない。 ・社会で必要とされる社会科学の視点に立った思考力が十分に身についていない。	・埼玉大学STEM教育センターとの連携によるSTEM教育を推進する。 ・夏季休業中にサイエンスフィールドワークを実施し、動植物の生態について生徒たちに興味関心を持たせる。 ・おれと切手の博物館を訪問し、新しい紙幣が作られるまでの課程と、その製造方法について学習する。	・STEM教育として、センサーを活用したロボットの作成やセンサー値を活用したデータの処理ができるようにする。 ・実験や観察を通して、自然環境について問題意識を持ち、幅広い知識を身につけていく。 ・訪問学習のレポートを書き、他人と意見を交換する。	< 1 学期のSTEM教育 > 中1 センサーの活用 中2 センサーを活用したロボットの作成 中3 センサーを活用したデータの処理。 ユネスコエコパークにてフィールドワークを実施し、各自で設定した研究の成果を校内で発表した。 「透かし」の技術や紙幣の品質の違いなどを体験することができた。	B A B	STEM教育では全学年が目標設定した段階まで到達することができた。 <2・3学期のSTEM教育> 中1 モーターを利用した車模型の作成 中2 ボールを運搬するロボットの作成 中3 日常生活で活用できるロボットを作成 10月に修学旅行でシンガポールを訪問し、日本とは異なる赤道直下での太陽の軌道を体感するという貴重な体験をした。	A B	STEM教育において、各学年で定められた目標の達成にとどまらず、日常生活での疑問を解決し、個々の知的好奇心を満たす発展的な学習を追及したい。 継続的な学習提携を通じて生徒達の成果発表を実施するなど、対外的な募集活動に発展させることを目指していく目標を設定したい。	STEM教育の取り組みは中学生にとって有益なものである。生徒たちが能動的に課題に取り組み、知識の詰め込みだけでなく自分がどのようなことに興味を持っているのかを客観的に知ることができる機会をこれからも作ってもらいたい。 人前でプレゼンテーションをするには、相手が見やすいと思えるような資料作りが大切である。大人になって企業で働く際には絶対に身につけておかねばいけないスキルを、中学時代で学んでいることは誇るべきものである。今後もさらに上を目指して、取り組んでいくことを期待している。
2	英語力を鍛える教育の徹底	・英語検定で全員が目標とする級に合格することが課題である。 ・スピーキングとリスニングの力が十分に身についていない。 ・海外の人々との交流を深め、生きた英語に触れる機会を増やすことが課題である。	・学年ごとに合格目標級を設定し、英検対策授業をさらに充実させ、目標達成を目指す。 ・NHK英語講座やEnglish Station（英会話サロン）で日常会話の練習をして、検定のスピーキング対策となる会話練習をする。 ・アメリカの高校生等とオンライン英会話の機会を増やし、文化の違いなどを学習しながら、意見交換を通して交流を深めていく。	・学年ごとの英検合格目標 中1: 4級 中2: 3級 中3: 準2級 ・英検2次試験において、100%の合格を目指す。 ・海外の人々との会話を通して学んだことを、レポートにまとめる。	受験級別の対策授業を実施し、4技能を高める指導を行った。 昼休みの英会話サロン(Englsih Station)を活用することができた。 アメリカ在住の生徒とオンラインで交流し、日本の文化等について伝えた。	B B B	1月に全学年で東京グローバルゲートウェイを訪問し、海外の大学キャンパスやレストラン等での会話を疑似体験することができた。 検定試験においては、設定した目標に向かって対策をして受験に臨んだ。GTECではCEFR-Jの最高レベルであるB2のスコアを取得した。	A A	英語検定やGTEC等の検定試験の合格率をさらに向上させる指導を模索していきたい。 ランゲージビレッジ等の施設を活用した語学研修を実施し、生徒が英語に触れる機会を増やす学校行事を企画していく必要がある。	なぜ英語を学習する必要があるのかを生徒たちに説き続けてもらいたい。学習することを押し付けるのではなく、様々な角度から生徒達の気づきに繋がるような先生方からの声掛けを続けてもらいたい。 検定試験においては合格したか否かで一喜一憂するのではなく、振り返りが大事である。フィードバックを重ねて、自分の学力や努力の成果を可視化し、自分自身で評価をするプロセスへと導けば、自ずと結果がついてくると思う。そのような教育を今後期待していきたい。

3	コミュニケーション能力の強化	・自分の考えを「表現する力」を身に着けさせることが課題である。 ・人前で自分の考えを適切に伝えられる力が十分に身につけていない。 ・自分の考えをグループの仲間に伝え、意見を集約する力を身につけることが課題である。 ・日本語検定において学年ごとに目標級を設けて、目標を達成させることが課題である。	・ノルティスコラ手帳の活用を徹底し、継続して言語を用いた日々の振り返りをする習慣を定着させる。 ・研究発表会で自分の考えを適切な表現で発表できるように指導していく。 ・CAPS等の活動を通して、自分の意見を伝える機会を増やし、協同して学ぶ力を育成する。 ・日々の授業の中で、検定合格に向けた対策を実践する。	・ノルティスコラ手帳の記録や手帳甲子園への作品応募 ・研究発表会の成果 ・「主体的・対話的で深い学び」の実践 ・日本語検定合格目標 中１：５級 中２：４級準認定 中３：４級	他の生徒の作品から新しい視点を得ることができた。 文章を推敲して、より伝わりやすい表現を模索していた。 チームを学年横断型にして活発な意見交換をしていた。 日々の学習の中で、正しい日本語を使うことを心がけ主体的に取り組むことができた。	B A B B	全校生徒の作品を展示し、校内投票を実施した。工夫して記入されている生徒の手帳と、自分のものとを比較することによって刺激を受けた生徒の様子がうかがえた。 JICAを訪問してSDG sについて理解を深め、世界が抱える問題について考える機会を設けた。また、青年海外協力隊の隊員の体験談を聞くことで、コミュニケーションの大切さを実感することができた。	B B	日記をつける習慣を通じて、日々の振り返りと目標設定の大切さを実感させる指導をより徹底させたい。 道徳の授業等を通して学年横断型の授業を多く設定し、他人の意見を聞くことにより得られる新たな視点を大切にする指導を増やしていく必要がある。	学校自己評価アンケート結果のいくつかの項目で、「生徒・保護者」と「教員」の間で差異が散見される。例えば、「日記をつける学習習慣の管理」については、生徒が自発的に取り組んでいると教員が思い込んでいた可能性も疑われる。この年頃は親に日記を見せることへの抵抗があるということも考えられるが、学校としてよりよい指導を模索していただきたい。 全学年が一堂に会して１つのテーマについて学ぶことは、上級生にとっても下級生にとってもメリットがある。今後も少人数教育の利点を活かし、様々な価値観を共有できる教育環境を整えてもらいたい。また、可能であれば、高校生も交えた６年の年齢差を活かした学習機会の創出を検討してほしい。
4	体験学習を通じて感性を磨き、人間力を養う	・生徒のプレゼンテーション能力を一層向上させることが課題である。 ・将来の大局的な視点に立った経営的な手法が十分に身につけていない。 ・教科横断的な思考力が十分に身につけていない。	・研究発表会の準備を７月からスタートさせて、余裕を持った指導をする。 ・経営シミュレーションゲームのCAPSを通して、利益を出すための論理的な思考を鍛える。 ・STEM教育を通して論理的思考力を育成する。	・研究発表会におけるプレゼンテーションの成果 ・CAPSの取組みの結果 ・STEM教育の成果	スライドを用いて相手の理解を促す工夫をしている。 他のチームよりも高い利益を出すために、試行錯誤を続けた。 試行錯誤を繰り返し、小さな成功を重ねることができた。	B B B	各自でスケジュールを管理し、担当教員と連絡を取って、知らないことを調べようとする姿が見られた。 嘉悦大学の学生に来校していただき、本校生徒に向けて自身の学生時代の話をしてもらうことで、将来の進路やキャリアに対する意識を高めた。	A A	５年ぶりに大勢の聴衆の前で研究発表会を実施することができた。聴衆を惹きつける話し方や有効なスライドの作成など画面の前だけでは違う表現方法の仕方を指導する必要がある。	自分でテーマを設定するということは、自分の生きがいを探すことに繋がる作業である。また、自分の伝えたいことだけを話しては、相手にうまく伝えることができないということを知ることでもできたと思う。生徒によって向き不向きはあるが、そのような体験をさせる機会を与えられたことが、最も評価できることである。また、中学３年生は「卒業研究」と称して３年間の集大成としても面白いと思う。
5	将来を見据えた進路指導	・自分の適性や力の把握が充分にできていない状況である。	・職業に対する意識を高め、仕事の具体的な内容について、探究する姿勢を持たせる。 ・オンラインでの企業見学を通して、自分の将来について考える機会を設ける。 ・スタディサプリを積極的に活用する。	・キャリアに対する意識を持たせる行事の企画 ・オンライン工場見学で得た知識をレポートにまとめる ・模擬試験や学力コンテストの実施	一般企業で活躍する卒業生から学生時代の話聞き、将来へのビジョンを持つヒントを得た。 ヤクルトのオンライン工場見学を通して、衛生管理や体調管理の大切さを学んだ。	A A	ベネッセの学力推移調査を年３回実施し、全国の私立中学における立ち位置を確認した。 リクルート社のスタディサプリを活用して、既習範囲(必要に応じて小学校)の復習をする指導を徹底した。	A B	本校の卒業生から直接生の話を聞ける機会は大変有益である。学生時代の悩みや受験についての話を聞かせる機会を継続して設けたい。	オンライン学習の効果は大きいと感じている。一方で、受動的にただ観ているだけでは学力の伸長は期待できない。習慣化も含めて、生徒の学習の定着に繋げることが大切なので、学校として工夫をしていくことを期待したい。 学習センターのチューターに協力してもらい、親や教師以外の方からの勉強に対する意識づけは効果的であると思う。
6	生徒募集の強化	・生徒募集を強化し、入学者数の増加を目指す。	・ホームページやSNSで積極的な広報活動をする。 ・魅力ある募集行事を企画する。 ・塾訪問を強化し、より良好な関係を作る。 ・新たな入試制度を確立する。	・フォロワー数の増加 ・イベント参加者数の増加 ・受験者数の増加 ・入学者数の増加	第1回 学校説明会(6月) 生徒研究発表会の報告 第2回 学校説明会(7月) STEM・理科実験教室実施 第3回 学校説明会(8月) うちわ作り・ダヴィンチの橋	B A B	第1回 入試説明会(9月) SH奨学生制度説明 第1回 入試説明会(10月) 募集要項解説 第1回 入試説明会(11月) SH模試・入試問題解説 第1回 入試説明会(12月) SH模試・受験の心得	B	SH模試の実施により多くの受験生や塾の先生方にアピールをすることができたが、本校に興味を示した受験生が最終的に入学を決めるための次の一手を準備する必要がある。	少人数教育をもっとアピールできるとよい。SH奨学生についてもすばらしい制度であると思うので、早い時期から強調していくべきである。 説明会への参加者数が増加した。来校してくださった直後のアプローチが大切なので、タイミングを逃さずに連続したアプローチをしていくべきである。また、合格者に対して入学前教育を２月から３月にかけて実施することを提案したい。

＊STEM教育とは、アメリカのオバマ元大統領が推進した教育システムで、これからの時代を担う子どもたちに必要な資質を統合的に統合的に身に付けさせていくという先進的な取組です。「STEM」とはScience(科学)、Technology(技術)、Engineering(工学)、Mathematics(数学)のそれぞれの単語の頭文字をとったものです。この教育は創造、変革、問題解決に必要な力を育てるもので、単なる理系科目教育やなくプログラミング教育では教科横断的に取り組み、社会や創造性と密接に結びついた生徒の主体性を育む総合的な教育システムです。